

『御曹司は初恋を捧ぐ』

著：名倉和希

ill：水貴はすの

江利也が予約したフレンチは予想どおり、かしこまった雰囲気の高級なフレンチレストランだった。ホテル自体は新しくないが、その店は最近リニューアルして、シェフが変わったという。

江利也はご機嫌だった——おそらく。

きれいな人形のようにあまり表情を変えない江利也だが、それでも慣れてくると微かな変化がわかるようになってくる。伊吹は江利也の機嫌を損ねないようにして、あたりさわりのない返事に終始していた。江利也は何がやりたいのか、伊吹のパーソナルデータを聞き出したがっていた。

家族構成だとか、どんな学校に通い、どんな家に住んでいたのかとか、現在一人暮らしだと言えどどんな生活をしているのかと聞かれた。続いて好きな食べ物、嫌いな食べ物、趣味——。

とりあえず聞かれて困ることはなかったので、適当に答えた。江利也は喋りながらも優雅にナイフとフォークを操ってみせ、伊吹はその自然な動きに感心させられた。フレンチのコースは美味かったが、江利也と二人きりでなかったら、もっと味わえたかもしれない。

「このバーラウンジはいいよ。落ち着いた雰囲気、ゆっくりできるから」

食事は滞りなく終わり、そんなふうにはバーへと誘われた。

「これは坂浦様、こんばんは」

バーの従業員が江利也の顔を見て、微笑んだ。顔を覚えられているらしい。この若さでこんなホテルのバーの常連なのかと呆れてしまう。黒服の従業員に案内されて窓際の席についた。

「ほら、きれいだろう」

「そうですね」

確かに夜景はきれいだ。細かな光が一面に輝いている。ネオンや車のライトが動いているのも、夜景自体がまるで呼吸をしているようで、この光の中で人が生きているのだと思わせてくれる。刹(せつ)那(な)の輝きは、いくら眺めていても飽きない。

だが、女を口説くのに最適なデートスポットにしか思えなかった。こんなところに自分を連れこんでどうするんだと、伊吹は内心で皮肉っぽく呟く。

しかし江利也が選ぶ店がこんな高級店でよかったと、いまになってから思う。

一般のサラリーマンがおいそれと利用できない店のほうが、人目につきにくい。下手に庶民的な店へ行って、坂浦開発の社員に見られたら何を言われるわからない。江利也がこんなふうには坂浦開発の社員を頻りに誘っているならまだしも、そんな話を伊吹は聞いたことがなかった。

一杯ずつカクテルを飲んだところで、江利也が急にかしこまったように姿勢を正した。「伊吹」

いよいよ本題に入るのかと、伊吹も身構える。長い前置きだった。

「今日は来てくれてありがとう。すごく楽しかった」

「こちらこそ、ご馳(ち)走(そう)様でした」

伊吹は会話がうまいほうではない。いったいどこが楽しかったのか理解できないが、本人がそう言っているのだからよしとしておこう。

「それで、ひとつ相談なんだけれど」

「……なんでしょう……？」

「僕は、君をととても気に入っている」

「……………は？」

「君を気に入っている」

聞こえなかったと思われたようで、繰り返されてしまった。

「ああ、はい、ありがとうございます」

怪訝そうな口調になってしまったが、とりあえず礼を言う。

「君ともっと親しくなりたい。できればもっと、近づきたい。こんなふうに、ときどき会ってもらえたら嬉しいのだけれど……」

「それはつまり、プライベートで友達付き合いをするということですか？」

「友達？ いや、友達ではなく、もうすこし親しい感じになりたい」

「友達より親しい？」

もっとはっきり言ってくれないだろうか。探るように江利也をじっと凝視していたら、ゆっくりと彼の視線が伊吹を捉(とら)える。きれいに澄んだ瞳が、濡れているように光っていた。すこしだけ開いた唇が、喘(あえ)ぐように呼吸をした。

伊吹は「まさか」と目を見張る。そんなことはないだろう。まさか。

伊吹はおのれの発想の突飛さに呆れた。

この御曹司は、もしかしたら伊吹を夜の相手として欲しているのか——？ なんて、あり得ない。いや、でも……この色気はなんだ。

「あんた、どんなふうに、親しくなりたいんだ？」

反応を見るつもりで、ぞんざいな口調に切り替えた。テーブルに置かれた江利也の手がぴくっと動く。その手を握ってみた。江利也は「あ……」とかすかに声を上げて、長いまつげを伏せる。

「二人だけの、秘密を作りたいのか」

「秘密……」

頬だけでなく耳も赤くなってきて、ストレートすぎる反応に伊吹は内心「ビンゴ」と叫びたくなった。

さて、どうする。おたがいに知らない仲で、このバーで偶然出会って口説かれただけなら断ればいい。けれど、知らない仲ではなく、さらに伊吹は会社で江利也の機嫌を損ねるなよと上司からしっかり釘を刺されていた。

あらためてまじまじと江利也を眺めた。完璧に美しい容姿だ。客観的に見れば、魅力的な男だ。

顔だけでなくスタイルもよくて、健康そうだ。それにテクニシャンかもしれない。これだけの容姿をしていたら、まわりが放っておかなかっただろう。

しかし……伊吹の好みではなかった。きれいなだけの人間に食指は動かない。できればもっと生き生きとしていて元気なタイプがいい。特にメンクイではないから、容姿は十人並みでかまわなかった。

そう、伊吹は女だけでなく男も恋愛対象になる。どちらかといえば女のほうが好きだが、男とも寝られるのは確かだ。実際に同性と付き合ったのは学生時代なので、もう十年近く前のことになる。会社の同僚は誰も、伊吹がバイだとは知らないはずだ。そうだと疑われるようなことをした覚えもない。もしかしたら江利也は恐ろしく鼻がきくのだろうか。

ここで断れば、確実に江利也の機嫌を損ねる。おそらく江利也は断られるパターンを想像していない。罪悪感などまるでなさそうな表情が、それを物語っている。

伊吹は頭を抱えなくなった。これがセクハラにあたるかもしれないことを、江利也はわかっているかどうかあやしい。

いや、そもそもセクハラの定義はなんだった？ 立場を利用して伊吹を連れ出したが、だからといって江利也は伊吹が断った場合にどうすると言葉にしていない。もちろん態度にも。課長と伊吹が勝手に気を回しているだけだ。

「もしかして、このホテルに部屋を取っているのか？」

「あ、うん、酔ったら帰るのが面倒になるかなと思って……」

「それは用意がいいことで」

伊吹は苦笑いして、ため息をついた。これはもう、覚悟を決めるしかないか。

この美しい男と一夜をともにできるなら、大枚をはたいてもいいと思う輩は山ほどいそうだ。セクハラではなく役得と思えばいいか。

今夜の手のこんだ誘い方からして、一度や二度ではすまないかもしれない。とはいえ、江利也は坂浦一族の御曹司、そのうち良家の娘と結婚するに違いない。一生、縛りつけられることはないだろう。このお坊ちゃんが飽きるまで、抱いてあげればいいわけだ。

伊吹は江利也の手を取ったまま立ち上がった。江利也も腰を上げる。

「部屋に行こうか」

伊吹が耳元で囁(ささや)くと、江利也は陶然としたまなざしで見上げてきた。もう欲情しているのか、瞳がさっきより濡れている。本当に泣かせてやったら、この人形のような御曹司はいったいどんなふうにならるのだろうか――。

伊吹はすこしサディスティックな欲望が湧いてくるのを感じた。

本文 p50～57 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>